

高齢者の生きがいに関する研究

著者	王 淑慧
雑誌名	教育思想
巻	46
ページ	133-143
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00126040

高齢者の生きがいに関する研究

王 淑慧（東北大学大学院・院生）

一、はじめに

1、研究背景

国際連合の定義によると、高齢人口が総人口の 7%を越え、高齢化しつつある社会を「高齢化社会」と定義し、高齢化が進行して 14%に達した社会を「高齢社会」と定義している。さらに、近年には、高齢人口が総人口の 20%を越えた社会を「超高齢社会」と呼ぶようになっている。

日本では益々高齢化が急速に進んでいると言われている。現在の日本では平成 28 年人口推計調査によると、日本の総人口は 1 億 2693 万人、65 歳以上の高齢者人口は 3459 万人、総人口に占める 65 歳以上人口の割合は 27.3%となっている。その中に、前期高齢者人口（65 歳から 74 歳）は 1768 万人、総人口に占める割合は 13.9%で後期高齢者人口（75 歳以上）は 1691 万人、総人口に占める割合は 13.3%である。平成 77 年（2065 年）約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上、約 4 人に 1 人が 75 歳以上の状況になると推測できる（平成 28 年高齢化状況白書、内閣府）。現在の平均寿命（平成 27 年）は男性 80.75 年、女性 86.99 年である。平成 77 年（2065 年）には男性 84.95 年、女性 91.35 年となり、女性の平均寿命は 90 年を超える。¹

このような現実と直面しながら、いかに健康で、生きがいをもって充実した日々を過ごしていくかは、個人にとっても、超高齢社会を迎えた日本にとっても大きな課題と言えよう。

2、研究目的

「老後はなぜ悲劇なのか」という本の中に以下のことを書かれている。「老人は思考も遅く動作も鈍い。独創的な考え方もできなくなる、自分自身のことと、自分の過去に縛られて、もはや変わることも成長することもできない。自己流のやり方に縛られ、ますます保守的になり、革新的なことを嫌い。前

¹ 平成 28 年高齢化の状況および高齢社会対策の実施状況、内閣府高齢社会白書より https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/gaiyou/28pdf_indexg.html（アクセス、2018 年 11 月 30 日）

進はおろか、かえって後退しがちだ。」²高齢期は人生の衰退期と言われているが、実際は本当にそうであるかという問いを確かめたい、本研究の目的は老人の生活実態を見ながら日常生活の中の諸活動がどのような意味を持っているのかということを明らかにすることである。

3、研究方法

本研究の研究方法はフィールドワークとインタビュー調査である。インタビュー調査は、まずインフォーマントに、ライフヒストリー（自分史）を語ってもらうことにした。ライフヒストリーは高齢者の過去の生活とともに、彼らの現在の生活にどのように捉えているのかを理解する一助になる。インタビューではインフォーマントのライフヒストリーに加えて、彼らの現在の生活、特に、参加している活動について語ってもらった。インフォーマントの典型的な一日の様子や、身近な高齢者の中で他人に紹介したいような模範的な老後の生き方と、逆に、感心しない生き方も描写してもらった。

4、先行研究

人は誰でも、何らかの「生きがい」を持つことで、人生の価値や意味を見出そうとする。生きがいは「生きるはりあい。生きていてよかったと思えるようなこと」と定義されている。³つまり、人にとって「生きる価値や意味」を与えるものである、と捉えることができる。「生きがい」という言葉の使い方としては、「生きがいを感じる」というのが一般的であり、主観的な感情を表す用語であるともいえる。従って、何を生きがいと感じるかは人によって様々であり、一概に定義できるものではない。人によっては「生きていく上でのはりあい」というやや消極的なものから、「人生をどう生きていくか」というその人の人生の根源ともいえるような積極的なものまで、さまざまな捉え方がある。

蘇らによると、生きがい感を「人生にかかわって生じる生きるよろこびや生存充実感といった心の状態であり、また、その心の状態をもたらす対象から得られる感情」と定義し、心の状態(感情)と対象を示唆している。⁴

² ロバート・バトラー著、グレッグ・中村文子訳『老後はなぜ悲劇なのか？アメリカの老人たちの生活』1986年、9ページ。

³ 広辞苑、新村出（1955 第1版 2008 第6版）岩波書店。

⁴ 蘇珍伊・林曉淵・安壽山・岡田進一・白澤政和「大都市に居住している在宅高齢者の生きがい感に関連する要因」厚生指標第51巻第13号、1-6.2004。

山下らによると、生きがい感の有無を「あなたは現在、生きがい、生きる張り合い、生きる喜びがありますか」と尋ね、生きていること、老人施設にすることが生きがいとなっている、という回答を得ている。⁵

本研究「生きがい」とは、文化人類学の立場からすると、一つの文化的概念である。人間を、意味付ける動物と見るクリフォード・ギアーツの考え方に従うと、生きがいとは、ある文化で人が生きていくうちに、意義を見出し、心の支えとして価値づけした概念と捉えることができる。人は、単に生物学的に生存しているだけではなく、「人生とは何か」、「何のために生きるのか」、「どのような生き方したいのか」という問いを発し、生きることに意味づけせずにはいられない動物なのである。その意味づけを行う際に、人々が知らず知らずのうちに依拠しているのが文化体系であると考えられる。

本研究では高齢者と信仰、高齢者と仕事という二つの方向で考察し、論を進める。

二、高齢期（老年期）とは

1、定義

WHO(世界保健機関)では、45歳以上を初老期(または向老期)。女性の場合は更年期)、65歳以上を老年期(または高齢期)としているが、身体的、精神的な老化の進み方は個人差が著しい。一般に、環境の変化に対する適応性が減り、情緒的不安定、記憶力減退、知的機能の低下が生じ、周囲への好奇心が減少して、自己中心的な傾向が強くなる。

2、高齢者の心理特徴

高齢者の心理的な特徴には、大きく分けて「精神機能」と「知的能力」がある。加齢に伴い、心理的にもさまざまな変化を伴うようになる。精神機能面を見てみると、感情面や人格面では、高齢者は一般的に、年齢を重ねるとともに頑固になり、保守的傾向が強くなる。また、人に対して厳しくなるとともに、疑いの感情を抱きやすくなるといわれている。さらに、死に対する

⁵ 山下照美・近藤享子・田中隆・門奈丈之・揖場和子・木下迪男「施設高齢者の生きがい感とQOLとの関連について」厚生指針第48巻第4号,12-19,2001。

⁶ グリフォード・ギアーツ(1926-2006)による文化の定義は「文化は象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる。象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系とを表している」ということである。

不安から、自分自身の健康状態への関心が異常に高まることもある。また、知的能力の面では年齢を重ねても、能力が比較的保たれる一方で、アルツハイマー型認知症などになると、記憶力の低下が顕著に見られることもある。これらのことから、高齢者の心理的特徴は年齢のみならず、さまざま病気とも密接なかかわりがあると考えられる。高齢者の精神機能の低下には様々な原因があるということが特徴である。その中で最も重要視したいものの1つに、喪失体験である。人は誰でも年を重ねるごとに、友人、兄弟、配偶者との死別を経験し、喪失感を味わうことになる。この喪失感はやがて、生きがいの喪失や孤独感の増強をもたらす。他にも、定年退職による「職業や社会的立場の喪失」や、身体面の老化といった心理的、肉体上の喪失体験も同様に、精神的機能の低下につながる原因にもなる。さらに、身体的な疾患の合併や、身体機能の低下、環境の変化も、精神機能の低下を招く原因になり得る。

3、老年期の役割と生きがいの自覚

1960～1970年代のアメリカにおける研究によると、老人ホームにあって十分な世話を受けている老人に対し、画一的生活を強要するのをやめて、自分の選択を許し、社会的事項についての責任をもたせると、活気を回復し死亡率も低下するなどの顕著な変化が認められた。また、日本における試みでも、老年期における算数の再学習が、いわゆるボケ防止に効果が大きいことがみだされている。配偶者を失った高齢者は急速に衰えていくことが多い。生きがい感や有能感の喪失は、物質的貧困と並んで老年期の心身の健康に影響するところが大きいといえる。

しかし、以上を考慮しても、なおかつ加齢とともに心身諸機能の衰退はある程度避けられず、これに伴って苦痛、猜疑、悲哀などの感情が迫ってくるのもやむをえない。初老期以降、老人性うつ病の比率が増し、とくに責任感の強いストレス過剰型のタイプの人に危険が大きい。このことは、自らの衰えを自覚すると、責任感の強い人ほど無力感や自尊心の障害に悩むことをよく示している。自己の状態に相応した適切な能力の発揮と自己充足感は、老年期には生きがいの源泉としてとくに重要である。かつての多世代同居家族の時代には、親類縁者との対人関係や交際行事も多く、また地域社会の伝統的習俗や暗黙の規範の習得などにも煩瑣なものがあり、これらについての老人の社会的知識は貴重であった。さらに、家族内でも、家業についての技能の伝達や子育ての知恵など、老人の体験や能力が尊重されていた。しかし、現在の核家族のもとではこのような状況はほぼ失われ、老人は「役割を失っ

た人」とよばれる。このような現状が老衰を加速することを、老人の周りの人々もよく認識して、衣食住の世話以外にも老人の適切な処遇と環境整備に配慮しなければならぬ。社会的支援の態勢整備も望まれる。とくに日本の現状では、この必要は大きい。

三、高齢者と信仰

宗教は、以下のような心理的な便益をもたらすことがある。1、人生や病気に対する前向きで希望に満ちた姿勢により、健康面の転帰が改善し、死亡率が低下すると予測される。2、人生の意義および目的意識が、健康にかかわる行動、ならびに社会的関係および家族関係に影響を及ぼす。3、疾患および障害に対する対処能力が高まる。⁷

「老いを迎え人生を振り返るとき、その心には様々な感情が見え隠れすると言っている。その心の状態を、晩年に自己を静かに省み、人生への諦観が深まる時、その心にはしばしば宗教的というにふさわしい響きが加わると表現している。ここでの宗教とは既成宗教の一形態を超えた悠々たる永遠性であり、自己を越え、時間を超えたものである。」⁸更に、神谷は生と死にも触れて、生が自然のものなら死もまた自然のものであり、死をいたずらに恐れるよりも現在の一日一日を大切に生きて行くことが重要であると言っている。その中心となる考え方は、生きている現在もなお人生の美しいものに触れることを喜び、孤独は加齢と共に深まっていくかもしれないが、静かに人生の味をかみしめつつ、最期の道のりを歩んでいこうとする、積極的な死への受容態度である。この姿こそ、文化の枠組みや既成の宗教にとらわれない、人間が根源的に有する信仰の姿ではないかと思われる。

従って、宗教信仰は老人たちの日常生活でどのような影響を与えているのかを調査を行った。⁹

1、特別養護老人ホーム暁星園

暁星園は昭和51年2月に設立したカトリックの特別養護老人ホームである。「暁星」とは、カトリック教会が伝統的に用いる「聖母マリア」に対する賛美の呼び名である。聖母マリアの絶大なるお力添えを願って名けられた。

⁷ Daniel B. Kaplan 「高齢者における宗教とスピリチュアリティ（霊性）」

⁸ 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980。

⁹ 筆者は2018年8月から11月まで、宮城県仙台市特別養護老人ホーム暁星園で調査を行った。以上の記述は、その調査結果に基づくものである。

現在、長期定員 120 名が在住し、平均年齢は 87.3 歳。その中に、女性の平均年齢は 89.1 歳、男性の平均年齢は 80.0 歳。車イスで移動する人は 107 人である。暁星園の特徴の一つとしてはパストラルケアである。パストラルは、羊飼いの (PASTOR) からきている言葉である。イエス・キリストは、ご自分は「私は良い羊飼いの。良い羊飼いの、羊 (私たち人間) のために命を捨てる。」と言われている。パストラルケアは、キリスト信者に限らず、すべての人に対する「魂心の深みへの配慮」と言える。その人その人の信仰や信条、習慣、国民性、個性を尊重し、自由で尊敬すべき人として認め、そこから歩もうとする道に協力する。

暁星園の食事時間では、朝食は朝 8 時から、昼食は 12 時から、夕食は 18 時からである。管理栄養士が入居者ごとに作成している「栄養ケア計画書」に基づき、身体状況及び嗜好を考慮し、個人の状態及び、口腔機能に合わせた食事提供している。お花見、夏祭り、芋煮会など季節の行事食が毎月あるそうである。特浴、個浴があり、頻度は週 2 回、利用者の状態に合わせて、ユニットの職員の介助により入浴することができる。排泄の自立をめざし、可能な限りトイレでの排泄を支援する。歩行ができない方やオムツ使用の人には、個別の排泄間隔にあわせて排泄援助をしている。内科、眼科、歯科、精神科などの医師、看護師も固定な頻度で回診している。そのほかに、音楽教室・生け花教室・祈りの会などの「おたっしやサロン」で、毎日をより楽しく過ごすことが出来るようにレクリエーションや趣味活動を提供されている。買物や外食、希望の場所への外出支援「わくわく夢プラン」を個別に行い、一人一人の生きがいをもって「自律」した生活を送れるように暁星園側が支援している。

2、パストラルワーカー

「聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。」これは暁星園で使われているミサ式次第のなかに書いてあることばである。

「私は 2003 年 4 月より勤務し、6 年目を迎えております。勤務時間は 9 時から 17 時までの 7 時間で月曜日から金曜日まで。ここはほぼ全員が園で帰天されている。」と暁星園で務めたパストラルワーカーという方が言った。

パストラルワーカーの仕事内容をまとめると、まずは日常居室訪問、対話と傾聴。次は終末期、体調不良の時あるいは精神不穏の時などの見守り。あとは、宗教的ケア。今暁星園はカトリック教会の施設とはいえ、住居者は全員カトリック教会の信徒ではない、プロテスタント信者もいる。聖体拝礼、

病者の塗油の準備、毎日聖書の提供や読み聞かせ、祈りなどの仕事もやっている。毎月の追悼式という行事を担当する。開所以来（32年間）のその月に帰天された方のために祭儀を行う。追悼式以外も、帰天者のお別れ会、葬儀関係、聖母被昇天祭、合同慰霊祭、共同墓参り、クリスマスミサなど全部担当している。

3、在住者の話

パストラルワーカーに紹介されて、Cさん話を聞くことができた。Cさんは体が不自由で1人で外出することができない。Cさんの部屋に入った時テレビを見ていた。「実はテレビを見るのが嫌いよ、でもやることないから」ってCさんが言った。Cさんは昔教師を務めていた、勉強することは今まで毎日続いていた。英語、歴史、政治の話もたくさんできるので驚いた。Cさんは脳の病気で記憶を失いやすい、自己紹介は四回をやって覚えてもらった。毎日起こったことを忘れないために、日記を書くことにしていた。その日誰に会ったか、何を勉強したか、何をやったか全部記録している。ただ、手の力がないから字をうまく書けない。「自分で書いたのに自分が読めない。」と自分の日記を見る時Cさんが言った。Cさん教師赴任の日に仙台大空襲が起こって、Cさんはその時生き残っていたが戦争のトラウマが深い。そして高校時代の時、お父さんは戦争の関係でフィリピンのマニラでなくなった。会話の中に、「生きるのが一番大事」「生」「平和」などのキーワードが何回も出た。今Cさん一番楽しいことは月二回のプロテスタント教会の礼拝。その日になったら老人ホームから出ることができる、同じ教会の友達にも会える。「友達と別れるのが嫌い、もうちょっとしたらここから出るから。」私と別れる時Cさんが急に泣き出した。

Cさんの話によると、高齢者は社会との関係を求めているのがわかった、高齢期は役割喪失の過程である。子供の独立は子育てを行う親としての役割を失うことである。三世代同居などの他世代同居は減少傾向にあり、子供の独立によって夫婦のみの生活が始まり、その後配偶者の死亡などによって1人暮らしになれば、夫あるいは妻といった役割も失うことにつながる。家族や職場、地域社会での役割が失われていく中で、役割喪失を補完する社会的な諸活動の必要性が高まっているとはいえる。

「人間は、1人では生きていけません。何事も努力すれば何とかなるといふ人もいますが、自分の努力で何ともできないこともあります。年をとるとなおさら、信仰を持つことで心が平安でいられることを実感できるようになります。」八十代の女性がおっしゃっていた。宗教活動を参加することによ

て、死後に対する希望ということは今後もっと生かして、積極的に生きることができる、永遠の故郷に行きたいという希望を持ち続けるのである。

四、高齢者と仕事

筒井健二の本「高齢者「働く生きがい」論」によると、高齢者の生きがいある生き方の選択肢の一つとして、「就労」があることはよく言われる。すなわち、老後を興味や娯楽で過ごすだけではなく、働くことに社会貢献の喜びとその意義を認める高齢者が働けるうちは働いて社会の役に立ち、いくらかでも収入があるかゆえに責任感や緊張感をより感じるなど、生き生きとした生活と通して、社会参加の喜びと健康で生きがいのある生活を送るという考え方がある。¹⁰

従って、高齢者の仕事の間—G 治療院でフィールドワークをした。〃

1、G 治療院

G 治療院は昭和 27 年創立され、今まで 66 年間続いた。経営者から従業員まで長年でサポートし合いながら歩んできた。授業員一番多いときは 60 名がいたが、今は経営者を含めて従業員計 18 人、その中に 65 歳以上の従業員は 10 人いる。業務内容については指圧、あんま、マッサージ、鍼灸、ほねつぎ治療院経営とスパ施設、ホテルなどへの施術者派遣業、リラクゼーション、エステティックサロン経営である。G 治療院は現任社長の母が創立され、現任社長が 25 歳の時親から店を継いだ。

65 歳以上の従業員の週平均出勤日数は 6 日間、日平均出勤時間は 7.5 時間で、65 歳以下の従業員の週平均出勤日数は 3.8 日間、日平均出勤時間は 5 時間である。加齢することによって、勤務時間が長くなる傾向が見える。

2、仕事の意味

「昔ここで働いた人が多くて、仕事終わって従業員みんなと一緒にお酒を飲んだり、カラオケに行ったりしたが、今は自分も年になって、街の環境を整理されていて昔の屋台も全部なくなった。だからこういう活動は最近の何十年間やったこと一回もない。腰と膝が痛いから店にいない時多いけど、で

¹⁰ 筒井健二「高齢者働く生きがい論」文藝春秋、2012。

¹¹ 筆者は 2016 年 11 月から 2018 年 11 月まで宮城県仙台市である治療院で調査を行った。以上の記述はその調査内容に基づくものである。

きるだけ仕事をやりたい、私がないとこころよくいけないから。」G治療院の社長が言った。

「ゆとり」のある暮らしという言葉が最近よく聞く。ついこの間までは「働き蜂」、「企業戦士」という言葉をよく耳にし、働きすぎることがあたりまえであった。」しかし、現在は、週休二日制が定着し、余暇を以下に過ごすかが人々の関心ごとになっているのである。特に、近代医療の発達と共に寿命が伸び、いわゆる高齢期の生活が人によっては人生の三分の一を占めるまでも及ぶようになった老後を、精神的にも経済的にも、ゆったりとのんびりと過ごしたいと誰もが望むことであろう。G治療院で出会った高齢者の話を聞くと、そのことがよく分かる。彼らは、今の仕事に対して、次のように語った。

「仕事ができるのが楽しいだね、自分の体を動かすことによって、相手を気持ち良くさせる。治してあげた、楽にしてさせてあげたという満足感がある。」G治療院の男性従業員Aさん（七十代）が言った。Aさんは視力障害があるので仕事あんまり選ぶパターンはなかった。目が悪いから仕事が限られていた。視力障害であんまマッサージ指圧あんまの仕事を選んだ。若い時目が見えやすかったが最近は見えなくなって来た。今の仕事をやるのがすごく楽しいと言った。

「合い揉みの先生のやり方下手だよ、お客さんに失礼だから、やめたほうがいいじゃない？」G治療院の女性先生がこんなことを店長に言った。きつい言い方だが、みんな真剣に打ち込んでいる姿でうかがえるということがわかった。ミラーの解釈¹²によると、老後の活動が意味あるものになるには、「その文化の中で許容される目的をもつか、あるいは、少なくとも何らかの形で役に立つ、または、収入を得うるもの」でなければならないと主張する。しかし、本研究で知り合った高齢者たちは、自身の活動が自分にとって意義あるものであるかどうかを決定するのに、必ずしもミラーの基準を使っていない。仕事内容に対して厳しい人が多く、特に、お客さんに満足させるかどうかこだわった。

「ここに来る高齢者全員が生活に経済的余裕があるわけでは決していない、他人にきちんとしているという印象を与えることが大事なよ、たとえば、経済的にゆとりがなくてもね」と店長がおしゃっていた。

¹² Miller, Stephen J, "The Social Dilemma of the Aging Leisure participant", in B. L. Neugarten(ed.), *Middle age and Aging : A Reader in Social Psychology*, 366-374. 1968

G 治療院で働いている女性の先生は必ず化粧し、男性の先生もズボン、白衣、靴下、靴、カバン等、全て清潔にし、髪型・ヒゲなども常に清潔感あふれる身だしなみを心がけている。特に、体臭・口臭・ワキガのひとは、医師・薬局などに相談の上、臭わないよう最善を尽くし、清潔に心がけのを基本ルールとして守っている。さらに、ここで働いている高齢者の服装は、若さを強調しているということである。

五、考察

1、暁星園の宗教行事に参加し、園側と老人たちの話を聞いて、宗教活動はコミュニケーションの場として機能しているのであろう。宗教活動という形式的な集まりに参加することによって、自分の寂しさと直面し、同じ境遇の人と出会い、話し合いというコミュニケーションを求めようとしているのではないかと考えられる。もう一つのポイントとして、宗教は心の拠り所になれる。信仰心を持つことによって、死に対する恐怖が軽減する。さらに、残りの人生の過ごし方がもっと積極的、立ち向かうことができるのがわかった。

2、G 治療院での調査は三年間渡って、考察は以下のようにまとめてみた。高齢者は仕事には責任感を持つ。高齢者は、一般の人々が年寄りは無能で無責任な者たちと見る傾向に対して強い不満を持っている。したがって、自分の仕事に対してきちんとした態度で取り組むことや、責任を持った発言をすることによりそういった傾向を払拭させているのではないかと考えられる。高齢者は人に役立つような仕事をする。このように高齢者は、他人に役立つことを通して自分自身が社会的に有意義な存在であることを再確認する。高齢者は活動的に暮らすことを求める。老後の仕事に従事する時どのように働くかということに関して、まず大事なのは毎日活動的に暮らすことであると考える。彼らは活動的に暮らすことによって、老衰による身体的障害やぼけるのを防止することができるかと主張する。身体や頭脳は使えば使うほど老化防止につながると考えるのである。同時に、自分はただの年寄りではないということを宣言していることにもなる。

六、結論

人生の衰退期と言われる高齢期の人々は、人々との絆を保ちながら、自らの自立性を保とうとしている傾向がある。高齢期には様々な病気を経験することが多い。しかし、様々な脈絡で、自立することの大切さを強調するのである。仕事を続けることも、宗教活動に参加することも、表面的活動で生き

がいを感ずるのではなく、裏側には年齢と関係なく、高齢期であるかどうかに関わらず、社会とのつながりを保ちつつ、自分の人生を頑張っているという姿勢が生きがいとつながっているのであろう。

参考文献

- 藤田真理子「アメリカ人の老後と生きがい形成-高齢者の文化人類学的研究」、大学教
育出版 1999。
- ロバート・バトラー「老後はなぜ悲劇なのか？アメリカの老人たちの生活」1975。
- E.H.エリクソン J.M.エリクソン H.Q.ギヴニック「老年期生き生きしたかわり合い」
みすず書房 1986。
- Daniel B. Kaplan「高齢者における宗教とスピリチュアリティ（霊性）」
馮臻「高齢者の宗教行動とその関連要因」2010。
- 高齢社会白書、内閣府
- 神谷美恵子「生きがいについて」みすず書房、1980。
- 筒井健二「高齢者働く生きがい論」文藝春秋、2012。
- 直井道子・中野いく子・和気純子「高齢者福祉の世界」有斐閣アルマ、2014。
- 本間容子・岡田みゆき「高齢者の生きがい」釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀
要 P69~79、2005。
- 中野好重・壺井尚子「高齢者における精神的生きがいに関する日独研究」大手前大学
社会文化学部論集、2004。
- 柴崎幸子・青木邦男「高齢者の生きがいに関する文献的研究」2010
- 蘇珍伊・林曉淵・安壽山・岡田進一・白澤政和「大都市に居住している在宅高齢者の
生きがい感に関連する要因」厚生指標第 51 巻第 13 号、1-6、2004。
- 山下照美・近藤享子・田中隆・門奈丈之・揖場和子・木下迪男「施設高齢者の生きが
い感と QOL との関連について」厚生指標第 48 巻第 4 号、12-19、2001。
- 金城一雄「近現代日本における家族機能の変容」沖縄大学短期大学部 1998。
- Miller, Stephen J, "The Social Dilemma of the Aging Leisure participant", in B. L.
Neugarten(ed.), *Middle age and Aging: A Reader in Social Psychology*, 366-374. 1968